Osaka University Knowledge Archive

Title	夢二とファッション
Author(s)	堀, 修
Citation	デザイン理論. 1991, 30, p. 131-132
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/52787
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

夢二とファッション

堀　修

竹久夢二（1884－1934）は，新聞・雑誌の挿絵画家として美術界に登場した明治38年（1905）から昭和初期にかけて，彼独特の主観主義的芸術観に基づく個性的様式を創出し，日本近代美術史上においてもひときわ異彩を放っている。その夢二は，日本近代美術史上では長らく傍流的存在にすぎなかったのであるが，昭和四十年代になって再評価が試みられ，様々な観点から夢二の研究がなされるに至っている。その夢二は，日本画，水彩画，油彩画，版画，デザイン等の美術分野のほか小説，詩などもこなし，実に幅広いジャンルにわたって多彩で特異な芸術的活動を展開していったのであるが，それらの作品は日本近代ファッションとも深い関わりをもっていることに気付く。夢二の活躍した時期が，特に日本近代婦人服飾史上においては洋装が市民服装としてはじめて登場する画期的時期に相当し，また夢二が正真の風俗画家としても評価されていることを考えると，夢二画に示された服飾表現は時代の証言として重要な意味を担ってくるように思われる。夢二と服飾の関わりについては近代服飾史研究でも取り上げられてはいるが，夢二の一部の作品あるいは特定の時期に限定された考察にとどまっており，全般的な考察はまだ十分になされていないのが現状である。そこで本論では，夢二画に広くあたり，彼の服飾観を示しながら，夢二が近代婦人服飾の様相を時代の証言者あるいは目撃者としてどのように捉えていったかを考察した。

一般に美人画家や風俗画家は，女性のキモノや服飾には深い関心を示すものであるが，夢二の場合もその例外ではなく，彼もまた服飾に関心を寄せまた深い造詣をも示したことを彼の著述を通して知ることができる。彼の画業の中心をなす「夢二式美人画」にみる服飾表現は和装を主体とし，そのキモノの文様は，前期には夢二独特の大柄で単純な草花文様等もみかけられるが，概して無地，縞柄あるいは小紋といった地味なもので表されるのを特色とし，本格的な風俗画家たちがキモノを技巧的に細かに描写する仕方とは対照をなす。それは，夢二がキモノの文様そのものよりも装いの美に眼を向け，無地等をその最善の文様とする彼のキモノ観に基づくものであったことが知られる。

夢二の描く女性が「夢二式美人」あるいは「夢二式の女」と称せられ，その「夢二式」が近代感覚溢れたニュースタイルとして当時の若い女性のファッションに影響を与えたことは近代服飾史上においても特筆されてよい。甘美で詩情溢れる情趣に満たされた夢二画には，リボン，ショール，パラソル，靴などの洋品や束髪（庇髪）と呼ばれた洋風髪型，さらには斬新でハイカラな趣味等がいずれも新鮮でみずみずしい筆致で示されていった。これが，当時の若い世代の女性達に新鮮な感動を呼び起こし，支持を拡げていくようになると，絵画の世界の中にのみにとどまることなく，現実の生活場面に登場し，「夢二式」が新たな女

性美の代名詞となり，夢二画の女を模倣したファッションが現れるようになったのである。夢二画が一つのファッションを生み出したことは意義深いものがある。それとともに，大正３年（1914）の趣味の店「港屋」では夢二自ら意匠した半襟や帯などを扱ったほか，大正後期には浴衣のデザインも手掛けたことも忘れてはならない。この「港屋」は大正12年の「どんたく図案社」ならびに昭和６年（1931）の「榛名山美術研究所」とともに，夢二の生活美術に対する意欲を示すものとして大きな意味をもつ。

一方，夢二は，関東大震災前後の女性ファッションの変化を見抜き，婦人雑誌などにその新しき装いについての所感を披瀝していることは殊に注目される。大正10年（1921）に夢二は，明治・大正にわたって日本の女性が「白菊がダリアに変形した」と語っているが，震災後の大正13年には「私達が街上で見かける若い娘から特殊に感じるものは，健康と理智――どうかすると肉體と機智だけしか見えない。さう言えば一體に實感的（肉感的ではない）に，或は感覚的になったとも言っても好いかしら，ある時代の殉情的なサンチマンなどは，男の側からも喜ばれなくなったのでせう」（「今昔ベタア・ハアフ私儀」婦人公論Ⅸ-３）と述べ，若い女性の装いに，価値観の変化に伴って，日本の伝統的文化に育まれた美的情趣が過去のものとなりつつあり，かの「ほの見ゆる美しさ」や抒情性が消え，後退してしまったことを惜しむのであるが，その一方で若い女性たちの装いに新時代の感覚を見出すのであった。震災を境に，夢二画においても洋装表現が女優，職業婦人，外国人など特定の女性から一般女性へと移行し，洋装化の普及の様子をうかがわせる。その洋装は，欧米のファッション・イラストレーションの影響も指摘できるが，震災後に描かれたワンピース形式のドレスまたはセーターあるいはブラウスとスカートの二部形式の装いは，いずれもスカート丈が震災前よりも短くなり，当時のファッションの様子を伝えていることろに特色がみられる。また洋装ではないが，震災後の夢二画でもう一つ注目してよいものに断髪和装の女性が登場していることである。この場合，夢二が「夏の街をぬく心」（婦人画報239）で述べているとおり，帯を胸高に締める新しいスタイルで描いている。それらは，洋装と同様，震災後の新しい風俗に敏感に反応したものとなっていることは注目される。

以上，夢二画にみられる服飾表現について和装，洋装の両面からの考察を試み，夢二の服飾表現が日本近代服飾史の歩みとほぼ同じ歩調をとって展開されており，夢二が当時の風俗，世相，さらには新しい装いに対して敏感に反応し，かつ風俗画家としてそれらを的確に捉え表現していったことを知ることができた。それは，日本近代服飾史の研究においても文献資料では得られない重要な情報をもたらすものであり，日本近代の洋装化の只中に身をおき，夢二という一人の人間の眼が捉えた服飾的世界は大きな意味をもつものといえよう。

（ほり・おさむ　京都女子大学）